特集

インタビュー
会長 長谷川博先生

鳥島アホウドリ調査 100回にしてなお夢は続く

インタビュアー&文: 田代紀子（本誌編集長／OWS理事）　写真: 長谷川博（OWS会長）

鳥島・新コロニー

2008年12月10日、長谷川博先生は11月23日からの100回目となる鳥島アホウドリ調査を終え、無事帰還した。第1回目の調査は1976年11月、東京都水産試験場大島分場所属の漁業調査指導船「みやこ」から双眼鏡で69羽のアホウドリを確認した。それから個体数はほぼ10倍に増加した、33年目の大きな区切りである。調査内容は最後にまとめた調査年表や、東邦大学のホームページ「アホウドリ復活への軌跡」（http://www.mnc.toho-u.ac.jp/v-lab/ahoudori/）を見ていただくとして、今回は長谷川先生の少年時代のエピソードなども含めた、バックボーンや人間性に迫りたいとインタビューを試みた。

初回　　69羽を観察　約42つがい　総個体数　185羽と推定
100回目　683羽を確認　418つがい　総個体数　2100羽と推定

鳥島

合計5年と3ヶ月

── 今回は100回ということですが、何か先生の中で思うことは?

「別にないよ、だって終わるわけじゃないから。あ～100回だなっていうだけで。でも、こんなに続けられるとは思っていなかった。32年の間に、日数にすると1915日、ほぼ5年と3ヶ月を費やしたことになる。平均して年に3回だけど、初めの頃はもっと少なかったね、お金なくって」

── 船のチャーター代はどれくらいかかるんですか?

「最初の頃は75万円、10日間分としてね。それから少しずつ上がってしばらくはその倍くらいだったけど、今はもうちょっと。この100回で、僕サイドで用意したチャーター代を合計すると6270万円、そのうち僕が払ったのが2380万円、大学から2350万円、『アホウドリ基金』から1540万円。でも、チャーター代以外のお金を加えると、もっとだけど」

基本的には大学が全部出してくれているのかと思っていました。「そりゃ甘いよね」と、一喝されてしまったが、アホウドリ保護のために、知識と行動力だけでなく、多額な資金を負担されての調査だったことは、かなりの驚きであった。

出会いと始まり

── そもそものきっかけは大学院時代のティッケル先生との出会いからと伺っていますが。

「就職するのに有利かと思って、農学部で昆虫学を勉強しようと67年に入学。ところが2年生になった68年から『70年安保』に向けて各大学でのろし

←新コロニーにおけるデコイ作戦は1992年の設置から3年目に最初の卵を確認するも、その後、足踏み状態が続き、12年後にしてやっと作戦の成功を確認することになる。その間にも長谷川先生は諦めることなく、毎年3月下旬から4月末まで、鳥島に長期滞在をして観察し、その結果を分析して、デコイ作戦の改善を提案した。今期はついに50組のつがいの営巣を確認するまでに

100回目の調査で

があがり、大学紛争の真っ只中に突入。激動の大学で、勉強どころじゃなかったの。学生運動に共感が無いわけではなかったけど、きついのは苦手でね。それより、大阪の南港埋め立て地の一部をシギ・チドリの保護区として残そうと、1969年に結成された『大阪南港の野鳥を守る会』という市民運動の方に興味をもったんです。京都から大阪の南のはずれまで、鳥の渡りの季節には週1で通い、観察。それで、大学院では本当に好きな鳥類の生態の研究をしようと決心し、理学部の動物学教室に移ったの。で、ある日、別の専攻の先生が、鳥をやってるイギリス人が自然人類学の部屋に来るから行ってみたら、と勧めてくれて。ホントたまたまなのよ」

そこで出会ったティッケル先生が、ニューヨーク動物学会や国際鳥類保護会議から研究助成を受け、イギリス海軍の協力によって、アフリカから香港経由ではるばる鳥島まで、アホウドリの調査のためにやってきたことを知り、驚く。

「イギリスはキャプテン・クックやダーウィンの時代から生物学探険に対して海軍が援助する伝統があるからね。でも、わざわざアフリカから来るんだよ、衝撃だったね。いろんな話を聞かせてもらったけど、その時点ではまだ自分がやろうとまでは思いもしなかったよ。だって大学院生が出来るような話じゃないからね。それでもしばらくしてから"勉強したいから、論文を送ってほしい"と手紙を書いたんだ」

ティッケル先生からしてみたら、いろいろと働きかけても誰も反応しなかった日本人の中で、興味を示した長谷川先生は一筋の光だったことだろう。以降、アドバイスしてくれるようになり、今でも交流は続いているそうだ。

「子供の頃は山麓の鳥と遊び、高校では生物部で登った高山でライチョウなどを見て、大学では干潟の鳥を観察して、ティッケル先生に会う前の年には京都の冠島でオオミズナギドリを見て、興味の輪が海の鳥までたどりついたところだったし、アホウドリはその仲間でしょ。その後もずっと気になってたの。でもね、そもそも鳥を研究している人が少ない上に、ほかの鳥の保護活動だってぼちぼちの時代だったんだよ。トキは小さな飼育施設しかなく、負傷したとき救護するくらいだったし、コウノトリの飼育ケージも貧弱で、その餌を補給するはずの田んぼは、5月に僕が行ったときなんか干からびてたもの。組織的に鳥を保護しようとか、数を増やすためにいい環境を作って、繁殖を促進しようなんて動きはなかったの。だから、僕の前に鳥島の調査に行ったのはNHKのテレビ・クルーのみ。一番の問題は、ティッケル先生が調査したときにはひなの数が24羽と増えていたのに、NHKの調査では11羽、僕が初めて上陸したときには15羽と、うんと減ってしまったこと。それで、これは自分でどうにかしなければ、と思った」

情熱で手にいれた協力体制

そして最初にぶちあたったのが資金繰りである。

「これもまた偶然なんだけど、北海道で出会った人からNHKの番組を制作したディレクターを紹介してもらって、さらにその人から鳥島上陸に協力した東京都水産試験場大島分場を教えてもらえたの。そこで、熱烈な手紙を書いたの。だって、僕自身チャーターするお金もないから、協力してほしいって、とにかく頼むしかないわけ」

そうして76年11月、記念すべき最初の調査。その時は残念ながら上陸できなかった。

「水産試験場の人にその後も鳥島に行くような機会があったら、僕を推薦して下さいって頼み、夢を語り尽くしたよ。向こうだってヒッピー風だった僕を何者だろうと警戒していたはずだから、分場長とか船の乗組員とかと一杯飲みながら、調査の必要性とか、いろいろ話して。そしたら"こいつは本物だ"って思ってくれたんじゃないのかな。民宿暮らしも大変だろうからって、自宅に泊めてくれたり、ご飯食べさせてくれたり。僕、図々しいでしょ。でも僕には案外すーっと人の中に入って行けちゃう能力があるみたい」

従来コロニー

溶岩流の上に火山灰が堆積した急な斜面の従来コロニーは、地崩れしやすい環境だった。そのため、1981年と82年には、環境省と東京都によるハチジョウススキやイソギクの株の移植による造成工事が行われた。1987年の大雨による火山灰の地滑り後は、1990年に緊急砂防工事と草の移植、1993年には大規模な砂防工事が行われ、その後2004年まで毎年、環境省・東京都によって保全管理工事が実施された。2005年からは、それまでの工事を補完する作業が長谷川先生によって継続されている。長谷川先生の熱い思いで作られた具体的な計画に基づく提案が、国や東京都を納得させた結果である

そんな長谷川先生の懸命さと性格が幸いして、多くの人の心を動かし、ここまで続いてきたのである。

「最初の3年間は3月も11月も東京都の水産試験場のお世話になったんだけど、6回のうち2回しか上陸できなかった。やっぱり自前でチャーターしないといけないと考えたけど、当時の僕の月給は約14万で、とうていまかないきれない。それで、3月の調査は85年まで東京都の水産試験場のお世話になった。79年の秋には日本野鳥の会に協力してもらい、その頃からようやくちょっと研究費をもらえた。それと、だんだんとTV取材とのタイアップも多くなった。その後、上がるチャーター代を準備できずに悩んでいたら、80年代の後半からは大学が1回分を出してくれるようになったんだよね」

自然児・長谷川少年

ところで先生は、いつから鳥に興味があったのだろう。

「子供の頃から。鳥が一番難しかったからなの。何がって、捕まえるのが。最初は虫を捕まえて、つぎに魚、そのあと鳥だったの。昔、田舎の遊びって、そんなものだったんだよ。小学5～6年の頃はメジロを飼ってた。鳴き声がいいから。ちゃんと毎日すり餌も作るんだよ。川で魚を釣って、干して、つぶして、小松菜とかも自分で栽培して、それらをすり鉢で擂って。竹で籠も作ったよ。中学から高校まではヤマガラを飼ってた。芸するのが楽しいから。でも、それだけじゃなくて、いろんな鳥を捕まえては飼ってた、一時的にだけど。その後で放した。ジョウビタキ、ルリビタキ、ホオジロ、シロハラ、ヒヨドリ、ツグミ。双眼鏡もいいのがない時代だから、ちゃんと観察するには捕まえるしかなかった。あらかじめ観察して鳥が来そうなところにトラップ（罠）を仕掛けるの。ふるいのようなものに杖立てて、目当ての鳥が好きそうな餌をそれぞれ入れておいて、食べるとストンと落ちるようにして（もちろん、法律で禁止されている。当時、田舎では子供のすることと、大目に見てくれた）。2つ3つ仕掛けておいて、学校から帰って、掛かってないかチェックする。駄目だったら、工夫するの。近くに来たかどうかも足跡なんかでわかるから、それもヒントになるでしょ。知恵比べするのよ、鳥と」

―捕まえてわかる鳥の魅力ってなんですか?

「羽がきれいで、あったかいし、鼓動がするし。小さいけどちゃんと生きてて、怒ると目がとび出るし。こんな奴が何千キロも遠くから飛んでくると思うと、すごい感じするよね」

と言う先生は、すごくやさしい表情だ。

アホウドリのひな

するわけだけど、凪にならないと乗り移れないし上陸できないでしょ。無理すると死ぬからね。でも、待つといつかは静かになるから、大学での仕事を考えながら、緊張感を持って待機しているよ」

「でもね、鳥だけじゃないんだよ、飼ってたのは。イシガメやクサガメも飼った。魚を捕ってきて弱らせて餌にするんだけど、夏は水がくさって臭いんだよね。あと、ニワトリやアナウサギ、ヤギなんかも飼ったよ。アユとかウグイも捕ってきて池に入れると、変なもの入れて、と爺さんに怒られたけどね」

朝の5時から学校をはさんで夜の7時まで、自然を満喫していたという少年時代の話は尽きない。

「近くに生き物が当たり前のようにいたんだよ、楽しかった。京大に行ったのも野外調査志望だったから。子供だったころ、物理学では湯川秀樹、生物界には今西錦司と木原均、というスーパースターが京都大学にいた。高校1年の時にその木原均さんが高校に講演に来てくれたの。その時にその先生率いるカラコルム・ヒンズークシ学術探検隊の記録映画を上映してくれたんだけど、未踏の地でのびのびと植物や地質、人類の調査・研究をしていて、フィールドワークっていいな〜って一発で憧れたの」

無人島での暮らし

── 調査現場のことをお聞きしますが、最も大変なことはなんですか?

「行き着くまでが一番大変。一度、沖でゴムボートに乗り移ってから島に上陸

── 上陸すると、どのような仕事を?

「産卵期の11月下旬から12月初旬は産卵数を調べ、3月下旬から4月末には、標識のついた鳥の生存を確認し、すべてのひなに標識を付けて、巣立つひなの数を確定。6月は2004年までは環境省と東京都が行ってきた従来コロニーの保全管理工事を現場で一緒に作業しながら指導してきたし、その後は一人で補完作業をしてるよ。土砂を流す排水溝にたまっている土砂を取り除いたり、泥流が流れ込まないように草を移植したり、新コロニーでは鳥の進入・離陸路の整備をしたりと」

── 島の生活で困ることは?

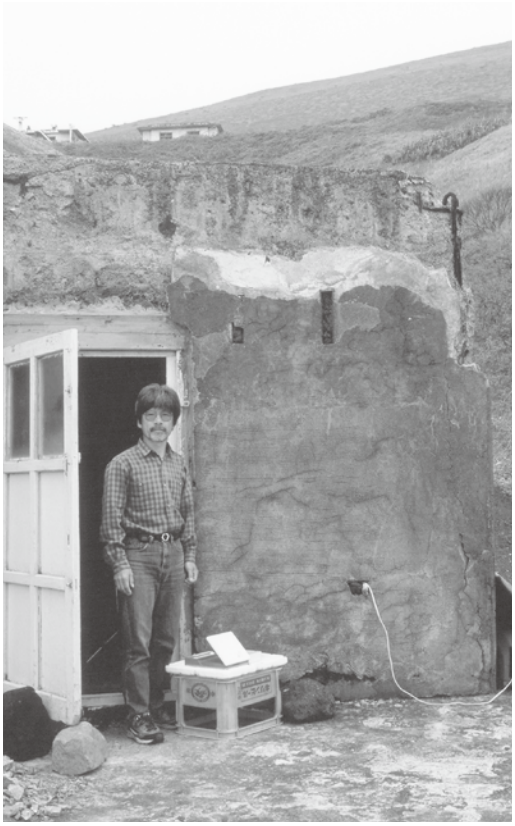
「それはないよ。だって困らないように、ちゃんと準備していくし、経験も加味した装備チェックリストがあるから。敢えていうなら、ビールがなくなる時くらいかな」

ちなみに、冷蔵しなくても美味しいビール長谷川ランキングは、1位エビス、2位黒ラベル、3位一番絞り、だとか。1日に缶ビールは2本と決めているらしい。

「日頃からなるべく歩くようにしてるから、体調を崩すこともないよ。鳥島では1日8〜10km歩くけど、雨の日は歩けない分、食事の量を少なくし、変なものは食べないようにし、“野菜も卵も火を通す”が鉄則。夏はダニから身を守るために身体にハッカ油を塗ったり、毎日水浴びしたり。90回以上も行ってる間に、いろんな免疫を獲得したかもね。それに、子供の頃から一人で山の中歩いている経験から、こういうことをしらたこうなるってだいたいわかるから、注意深く行動して、危険を回避しているんだよ」

単独調査も多いようだが、たった一人という辛さはないのだろうか。

「全然ないよ。むしろ、一人の方が気は楽。僕と同じかそれ以上の野外経験があればいいけど、そうじゃないと、事故起こったらどうしようとか心配で。もし



滞在中ベースキャンプとして利用しているのが、広さ約30平方メートルのこの避難小屋。無人島で生活するには忘れ物は禁物のため、調査計画書のほか、調査装備やキャンプ・登山用品、生活用品、衣類、食料の各項目ごとに綿密なチェックリストを作って備えている。鳥島には水が湧いていないため、飲み水、料理用の水も持参する必要があり、ゴムボート2往復ほどの荷物になるようだ

そうなったら僕、次に行けなくなっちゃうからね」

大きな力を動かすためには

――国や東京都への働きかけでの苦労はあったのでしょうか?

「最初の頃、アホウドリの足環標識をつけるために捕獲許可申請をしたら、その書類をたらい回しにされたことがあって、その時に学習したの。特殊な鳥や前例のないことに関しては、役所はどうしていいかわかっていないことを。それで、提案したり、どうすればよいか聞き出したりすることにした。また、自分のやりたいことを通すには、具体的な計画を作って、こうすればこうなるってことをデータに基づいてきちっと説明するようにしたの。そうするとやる気があるってわかってもらえるから、次からは話がすんなりと進む。お役人は自分の判断で失敗するわけにいかないでしょ、そんな相手の立場なども配慮しながら、自信を持って論理的に説明すれば、納得してもらえるんだよ」

安心と感動のドラマ

――従来コロニーの保全管理と、デコイ作戦による北西斜面の新コロニー形成を推進してきたわけですが、新コロニーの成功を感じたのは?

「2004年の11月。それまでずっと1個だった卵が4個になったときだね。近くにも若い鳥がさかんに求愛ダンスしていたし。その前の年の4月から、若い鳥がどんどん新コロニーに来ていたから、うまく行くだろうと。この計画を始めてから12年目にしてやっと成功。途中、なかなか増えなくて、胃が痛むくらいのことも多かった歳月だけど。それからは15、24、35、50個と年々急成長。2011年には100組と予想!」

――では、涙が出るほど感動したのは?

「1995年11月、新コロニーで最初の卵を見たときかな。あわてて撮った写真がぶれてしまったほど興奮して、お～ビールで乾杯だ～って。雄叫びよ、泣くんじゃなくって。そのあとちょっと涙ぐんだけど。新コロニーに設置したデコイに反応した最初の鳥が来たときもうれしかったし、2004年に卵が4個になったときもうれしかったし、今年もうれしかったよ、卵50個だもの。もう、うれしいことばっかり」

――100回でこれだけの数に増えたのも、予想外の喜びでは?

「そうなんだよ。最初の上陸の時の個体数はだいたい180～190で、それまでの感じでいけば15年で2倍だったから、順調にいって、自分が死ぬまでには1200～1600羽に増えればいいと予想していたの。だけど、今2100羽で、60歳にして遙かに超えちゃったからね」

これからも変わらず

――今後、鳥島・新コロニーでの新展開などはあるのですか?

「ないよ。あとは増やすだけだから。鳥島に5000羽以上いれば、小笠原諸島の聟島を新繁殖地にしようとひなを移す必要はないわけだけど、2000羽あまりなので、まだまだ少ない。2000年に三宅島で大噴火、その前には大島もあったから、鳥島もいつ噴火するかわからないから、その危険に備えて予防のための小笠原移住作戦だから。僕は

今まで通り、鳥島のアホウドリを増やすために、通い続けるつもりだよ」

――6月の保全管理作業も継続?

「6月に行って営巣地に手をかければ、それだけひなの数も増えるからね。業者に入ってもらうと、最低で数百万円かかるから、自分でやるしかないんだよ」

――いつまで鳥島へは行こうと?

「このままでいくと、2020年（長谷川先生は72歳）で1000つがい、総個体数5000～6000羽も夢じゃない。そこまでは継続したいと思ってる、定期的でなくてもね」

――定年過ぎて、時間があったらしたいと思うこともあるんですか?

「一度は繁殖期にシーズン通して（10月から5月まで）調査してみたいよね。そのためには補給船も含めて5～6回チャーターしないといけないから、また資金繰り（およそ1000万円）が大変だけど。でも、行くなら定年になってすぐだね、体力的にもきつくなる前にね」

――最後に何か始めようと思っているメンバーにアドバイスなどあれば。

「思ったらやるしかないんだよ、やりながら考えていくしかね。僕の場合は、個体数を増やすための基礎研究と保全作業という単純なものだったけど、それはほぼ達成したと思う。これからもアホウドリの増加にともなって変化してゆく

風景を見続けたいと思う。それができるのは、最初の一歩があったからこそ」

私たちが躊躇している一歩を、ぐっと押してくれるような一言で終わったインタビュー。動物への愛情と実績に基づく説得力のある言葉に、寒い年末もホットになる、感動しきりの2時間だった。お忙しい中、快く応じて下さった長谷川先生に感謝である。

2008年12月22日　東邦大学にて

2008年11月（100回目の調査）

長谷川先生によるアホウドリの保護研究・調査年表（100回調査まで）

（ ）内は調査回数 ＊は未上陸　年/月　主な調査内容　【船・飛行機】　同行者

1973年4月		イギリス人鳥類学者ティッケル博士がイギリス海軍の協力によって鳥島に上陸し、アホウドリのひな24羽と成鳥25羽を観察した。
1973年5月		ティッケル博士は、帰途、京都大学理学部動物学教室に立ち寄り、大学院生だった長谷川博氏と偶然に出会い、強い刺激を与えた。
1973年10月～翌年5月		日本放送協会のテレビ取材チームが5回にわたって鳥島に上陸し、アホウドリの生態について映像取材を行なった。この繁殖期に11羽のひなと62羽の成鳥・若鳥が観察された。
(1*)	1976/11	沖から繁殖つがい数を観察【大島分場「みやこ」】単独 長谷川博氏はアホウドリの繁殖状況の調査をこの時から再開。 上陸はできず、燕崎の沖の船上から成鳥・若鳥あわせて69羽を観察。
(2)	1977/3	上陸して、ひなに足環標識【みやこ】八丈支庁 15羽のひなと71羽の成鳥・若鳥を観察。
(3*)	1977/11	沖から繁殖つがい数を観察【みやこ】単独
(4*)	1978/3	沖からひなを観察【みやこ】単独
(5*)	1978/11	沖から繁殖つがい数を観察【みやこ】単独
(6)	1979/3	上陸して、ひなに標識【みやこ】単独
(7)	1979/11	上陸して、産卵数を調査【第5稲荷丸】（日本野鳥の会との共同調査）花輪伸一
(8)	1980/3	上陸して、ひなに標識【みやこ】NHK・環境庁・野鳥の会
(9)	1980/11	上陸して、産卵数を調査【第5稲荷丸】野鳥の会・神奈川県衛生研究所（矢部辰男）・日本経済新聞社（藤田彰）
(10)	1981/3	上陸して、ひなに標識。工事予備調査【みやこ】八丈支庁林務係
(11)	1981/6	ススキ移植工事（西地区）【第5稲荷丸】八丈支庁林務係・工事関係者 環境庁・東京都は燕崎コロニー西地区にハチジョウススキとイソギクの株を移植する工事を行なった。
(12)	1981/11	上陸して、産卵数を調査【第8稲荷丸】竹重厚志
(13)	1982/3	上陸してひなに標識【みやこ】岩波映画取材（野瀬秀男・大洞陽佑・佐藤現）
(14)	1982/6	ススキ移植工事（東地区）【第5稲荷丸】八丈支庁林務係・工事関係者
(15)	1982/11	産卵数調査【第8稲荷丸】馬場孝雄
(16)	1983/3	ひなに標識【みやこ】単独
(17)	1983/11	産卵数調査【第8稲荷丸】共同通信社（上妻聖）
(18*)	1984/3	船が故障し上陸できず、引き返す【みやこ】中野憲明
(19)	1984/4	ヘリで上陸、ひなに標識【朝日新聞社ヘリコプター】朝日新聞社（平山宏）
(20)	1984/11	産卵数の調査【第8稲荷丸】沢田喬・早川正美
(21)	1985/3	ひなに標識【みやこ】沢田喬・早川正美 保護計画が成功を収め、繁殖成功率は70%に引き上げられ、51羽のひなが巣立った。
(22)	1985/11	産卵数調査【第8稲荷丸】TBS「わくわく動物ランド」取材（TV取材クルー）
(23)	1986/3	ひなに標識・工事予備調査【みやこ】八丈支庁林務係
(24)	1986/6	ススキ補植・砂防工事【第5稲荷丸】八丈支庁林務係・工事関係者
(25)	1986/11	産卵数調査【第8稲荷丸】Graham Robertson
(26)	1987/4	ひなに標識【読売新聞社ヘリコプター】読売新聞社（水野正矩）
1987年秋		燕崎の斜面で地滑りが起こり、土石流となって海岸まで流れ下った。
(27)	1987/11	産卵数調査《受難百周年供養》【第8稲荷丸】藤井雅典
(28)	1988/4	ひなの調査【朝日新聞社ヘリコプター】「新どうぶつ記」取材・朝日新聞社（荒木高伸・八重樫信之）
(29)	1988/5	巣立ちの観察【第8稲荷丸】NTV「追跡」取材(TV取材クルー)
1988年秋		土石流のあとに泥流が発生して、燕崎コロニーの西地区に流れ込んだ。
(30)	1988/10	鳥島への飛来調査・観察（NTV取材）【第8稲荷丸】NTV「追跡」取材
(31)	1988/11	産卵数調査【第8稲荷丸】NTV「追跡」取材
(32)	1988/12	孵化の観察【第8稲荷丸】NTV「追跡」取材
(33)	1989/2	ひなの観察【朝日航洋ヘリコプター】NTV「追跡」取材
(34)	1989/4	ひなに標識【第8稲荷丸】NTV「追跡」取材
(35)	1989/5	巣立ちの調査【第8稲荷丸】NTV「追跡」取材
(36)	1989/10	飛来の観察【第8稲荷丸】TBS「わくわく動物ランド」取材（TV取材クルー）
(37)	1989/11	産卵数調査【第8稲荷丸】Diane Ackerman, Peter Harrison
(38)	1989/12	孵化の調査【第8稲荷丸】TBS「わくわく動物ランド」取材
(39)	1990/3	ひなに標識・砂防工事予備調査【優宝丸】環境庁・東京都 「従来燕崎コロニーの保全管理」と「デコイと音声再生による新コロニー（北西斜面）形成の人為的促進」を、アホウドリ保護基本構想として、環境庁に提案した。
(40)	1990/4	ひなの調査【第3稲荷丸】TBS「わくわく動物ランド」取材
(41)	1990/5	巣立ちの観察【第3稲荷丸】TBS「わくわく動物ランド」取材
(42)	1990/7	砂防工事【孝陽 II】八丈支庁林務係・工事関係者
1990年9月～12月		内山春雄さんがアホウドリのデコイの原型をボランティアで製作した。
(43)	1990/11	産卵数調査【貴洋丸】BBC番組Marathon Birds取材（Barrie Britton）
(44)	1991/4	ひなに標識【貴洋丸】単独
1991年夏		西尾製作所はデコイの原型から鋳型をつくり、プラスチックのレプリカを量産して着色し、多数のデコイを完成させた。
(45)	1991/11	産卵数調査・デコイ予備調査【第8薬王丸】フジテレビ取材、山階鳥類研究所・三洋電機 山階鳥類研究所と共同でデコイ10体を鳥島に運びこみ、燕崎コロニーでデコイの誘引効果について予備実験を行なった。
(46)	1992/4	ひなの調査・デコイ予備調査（続）【友丸】FTV・山階鳥類研究所・ 三洋電機 鳥島北西斜面の新コロニーの予定地で、デコイ16体を用いて誘引効果を実験し、デコイと音声再生の有効性を確認した。

1992年秋		環境庁はアホウドリを「種の保存法」の対象種に指定して、燕崎の従来コロニーの保全管理と北西斜面の新コロニー形成を並行して推進する方針を固めた。
(47)	1992/11	産卵数調査・デコイ設置【友丸】山階鳥類研究所・朝日新聞社(谷川明生) 合計41体のデコイを鳥島の北西斜面の中腹に設置した。
(48)	1993/2-3	音声放送装置設置【海保庁やしま】環境庁・山階鳥研・三洋電機・FTVデコイを追加して50体とし、音声再生放送装置(三洋電機製)を作動させ、新コロニー形成のための「デコイ作戦」が本格的に始められた。
(49)	1993/4-5	ひなの調査・デコイ観察【友丸】内山春雄・坂脇公賀
1993年7～9月		環境庁・東京都は燕崎の従来コロニーを保全するために大規模な砂防工事を実施した(以後、2004年まで毎年6月に砂防と植栽を軸とする保全管理工事を実施)。
(50)	1993/7	砂防工事予備調査【東邦航空ヘリ】東京都林務課・工事関係者
(51*)	1993/7-8	前線停滞し、上陸できず帰還【マリンたかさい】八丈支庁林務係・工事関係者
(52)	1993/8	砂防工事現地指導【マリンたかさい】工事関係者
(53)	1993/10	デコイ設置・産卵観察【海保庁やしま】山階鳥類研究所・三洋電機・NHK
(54)	1993/11	産卵数調査・デコイ観察【友丸】朝日新聞(谷川明生)・嶋田哲郎
(55)	1994/3-4	ひなの調査・デコイ観察【友丸】千葉県立中央博物館(林紀男)
(56)	1994/6	砂防補完工事・シバ植栽【友丸】工事関係者
(57)	1994/11	産卵数調査【友丸】テレビ東京「人間劇場」取材凸版印刷映像企画部(福田雅之ほか)
(58)	1995/3-4	ひなの調査・デコイ観察【友丸】単独
(59)	1995/6	営巣環境保全・維持工事【友丸】東京都林務課・工事関係者
(60)	1995/11	産卵数調査・デコイ観察【友丸】単独 新コロニーで1組のつがいが最初の卵を産んだ。
(61)	1996/3-4	ひなの調査・デコイ観察【友丸】朝日新聞社(内山幸男)・浜憲治
(62)	1996/6	営巣環境保全・砂防工事【波太郎丸】八丈支庁林務係・工事関係者 新コロニー初の卵から誕生したひなが成長して巣立った。 新コロニー形成の第一関門を突破した。
(63)	1996/11	産卵数調査・デコイ観察【友丸】単独
(64)	1997/3-4	ひなの調査・デコイ観察【友丸】単独
(65)	1997/6	営巣環境保全・砂防工事【波太郎丸】八丈支庁林務係・工事関係者
(66)	1997/11	産卵数調査・デコイ観察【友丸】Rick Steiner
(67)	1998/3-4	ひなの調査・デコイ観察【友丸】単独
(68)	1998/6	営巣環境保全・砂防工事【波太郎丸】八丈支庁林務係・工事関係者 従来コロニーで繁殖成功率が67%に回復して、129羽のひなが巣立ち、新コロニーからは1羽が巣立った。
1998年10月		新コロニー形成の足踏み状態を打開するため、デコイを94体に増やし、忠実な音声を放送することができる再生装置(三洋電機製)を設置した。
(69)	1998/11	産卵数調査【友丸】John Albertsen 従来コロニーで212個、新コロニーで1個、合計213個の卵が生まれた。産卵数がはじめて200個を超えた。
(70)	1999/3-4	ひなの調査・デコイ観察【友丸】読売新聞社(三島勇・河村道浩)
(71)	1999/6	営巣環境保全工事【次郎丸】八丈支庁林務係・工事関係者 従来コロニーで142羽、新コロニーで1羽、合計143羽のひなが巣立ち、鳥島のアホウドリの総個体数は推定で1,000羽を超えた。
(72)	1999/11	産卵数調査【友丸】単独
(73)	2000/3-4	ひなの調査・デコイ観察【友丸】単独
(74)	2000/6	営巣環境保全工事【次郎丸】八丈支庁林務係・工事関係者
(75)	2000/7	営巣環境保全追加工事【友丸】単独
2000年8月1日		アホウドリは、アメリカ合衆国連邦政府の「生物種保存法」(Endangered Species Act, 1973)の絶滅危惧種に指定された。
(76)	2000/11	産卵数調査【友丸】朝日新聞(小林正明)
(77)	2001/3-4	ひなの調査・デコイ観察【友丸】読売新聞(笹沢教一・松田賢一)
(78)	2001/6	営巣環境保全工事【友丸】八丈支庁林務係・工事関係者
(79)	2001/11	産卵数調査【友丸】単独
(80)	2002/3-4	ひなの調査・デコイ観察【友丸】単独
(81)	2002/6	営巣環境保全工事【友丸】八丈支庁林務係・工事関係者
2002年8月11日		鳥島が63年ぶりに小規模な火山噴火を起こした(噴火活動は9月初めに終息した)。
2002年11月		アメリカ合衆国内務省魚類野生生物局「アホウドリ再生チーム」の第1回会合がハワイのカウアイ島で開かれ、「アホウドリ再生基本計画」の草案がまとめられた。
(82)	2002/11-12	産卵数の調査【友丸】単独
(83)	2003/3-5	ひなの調査・デコイ観察【友丸】単独
(84)	2003/6	従来コロニー保全管理工事【友丸】八丈支庁林務係・工事関係者
(85)	2003/11-12	産卵数の調査【友丸】単独
(86)	2004/3-4	ひな調査・新コロニー観察【友丸】単独
2004年5月		「アホウドリ再生チーム」の第2回会合が日本でもたれ、小笠原諸島に第3繁殖地を形成する計画が決定された。
(87)	2004/6	従来コロニー保全管理工事【友丸】工事関係者
2004年8月		ウルグアイのモンテビデオで開催された国際アホウドリ・ミズナギドリ会議のワークショップで、小笠原諸島第3繁殖地形成の構想と方法が詳細に議論され 、その後に催された「アホウドリ再生チーム」の第3回会合で、「ひな移住計画」がまとめられた。
(88)	2004/11	産卵数の調査【友丸】単独
2004年～'05年繁殖期		新コロニーで4組のつがいが産卵し、4羽のひなが巣立ち、新コロニーが確立した。開始から12年かかって「デコイ作戦」の成功を確認できた。
(89)	2005/3-4	ひなの調査・新コロニー観察【友丸】単独
(90)	2005/7	従来コロニー保全管理補完作業【友丸】単独
(91)	2005/11	産卵数の調査【友丸】大江千尋
(92)	2006/3-4	ひなの調査・新コロニー観察【友丸】単独
(93)	2006/6	従来コロニー保全管理補完作業【友丸】単独
(94)	2006/12	産卵数の調査【友丸】単独 新コロニーで24組のつがいが産卵し、鳥島全体では341組が産卵した。
(95)	2007/4	ひなの調査・新コロニー観察【友丸】単独 新コロニーから16羽、全体で231羽のひなが巣立った。巣立ちひなの数がはじめて200羽を超し、鳥島集団の総個体数は推定で約1945羽に回復した。
(96)	2007/6	従来コロニー保全工事補完作業【峰生丸】単独
(97)	2007/11	産卵数の調査【峰生丸】大江千尋 従来コロニーで343組、北西斜面の新コロニーで35組、燕崎崖上で4組、合計382組が産卵した。
2008年2月19日		小笠原諸島に第3繁殖地を形成するため、鳥島の従来コロニーから10羽のひなが聟島に運ばれ、5月まで人の手で野外飼育された。
(98)	2008/4	ひなの調査・新コロニー観察【峰生丸】単独 鳥島から合計270羽のひなが巣立ち、鳥島集団の総個体数は推定で約2140羽になった。
2008年5月		聟島で野外飼育された10羽すべてのひなが巣立った。
(99)	2008/6	従来コロニー保全管理補完作業【峰生丸】単独
2008年8月		南アフリカのケープタウンで「アホウドリ再生チーム」の第4回会合が開催され、今後の保護方針と保護事業計画が議論された。
100	2008/11	産卵数の調査【峰生丸】大江千尋・堀越雅晴 新コロニーで50組のつがいが産卵し、鳥島全体では418組が産卵した。

長谷川 博(はせがわ ひろし)プロフィール

OWS会長・東邦大学理学部教授

1948年静岡県生まれ。京都大学卒業。1976年から伊豆諸島鳥島に生息する絶滅危惧種アホウドリの保護・繁殖研究を続け、2005年に第5回沼田眞賞、2006年には第14回山階芳麿賞などを多数の賞を受賞。「風にのれ!アホウドリ」「アホウドリ愛のシンフォニー」「50羽から5000羽へ」「アホウドリに夢中」など著書多数。

開催決定

長谷川博●鳥島調査100回記念特別企画
第48回トークセッション

「アホウドリ:未来への飛び立ち」

2009年3月20日(金・祝)14:00～16:00

※詳しくは本誌P12をご覧ください。